

## 井手英策先生インタビュー 専門：財政社会学

(インタビュアー：大槻茉椰)

### 「 財政社会学は社会と財政を結びつける学問 」

#### ① 「先生の専門とされている財政社会学について教えてください！」

財政の変化を歴史的に分析しながら、社会の変化じたいを解き明かす、あるいは社会の価値や認識の変化をとおして財政制度の変容を読み解く、これが僕たちの学問です。

例えば、20年かけて税の安い国になったとするじゃないですか。それはパッと見るといいことに思えるかもしれない。でも、国家や政治家が国民の信用を失って税を取る力をなくしたのかもしれないし、他者のために痛みを共有することを社会が拒む、分断された状況が生まれたのかもしれない。このように社会と財政の関係変化は、トータルとしての社会の変化と結びついているんです。

僕たち財政社会学者は総合的な学問、統合の学を追究したいと思っています。いまの社会科学は細分化が進んでいるじゃないですか。円柱は真上から見たら円だけど、横から見たら長方形に見える。でも真実は「円柱」だということ。社会科学の分析対象である社会もおなじだと思うん

です。理論的に、定量的に分析する人がいてもいいし、国際比較をする人もいていい。でも、大切なことは、それぞれの成果を吸収しながら、社会の実像（リアル）に近づいていくこと。僕は歴史という長期的な変化をよりどころにして、さまざまな研究成果を統合する学として、財政社会学を発展させたいと思っています。

「人間は運で左右される生き物。運不運で変わってしまう事象こそ学者が戦う」

② 「先生の授業って、とってもあたたかい気がします。その源はなんですか？」

自分の無能さを知っているからじゃないかな。人間って一人の力でだれかを幸せにできるほど、強くも、えらくもないじゃない？実は、いままで3回死にかけたことがあるのね。3回も死にかけると、自分の無力さ、そして運・不運で人生が左右されることに気づくよね。僕なんてまったく運だけで生き延びているんです。

変なこと言うけど、僕はいますごい幸せなのね（笑）家族がいて、愛すべき仲間やゼミ生たちがいて。でも、僕が運が良かっただけで幸せになれたのと反対に、運が悪かっただけで、ものすごく悲しい目にあって

いる人がいるじゃない？

「生まれた家が貧乏だった」「生まれたときに障がいがあった」こんな  
の 100%運だよ。そんな運で一生が決まる社会はおかしい。理不尽だ  
し、不条理だよ。この前、講義で「田舎から来た子、手をあげて」って  
聞いたのね。すると 100 人くらいの学生のなかで手をあげたのはたった  
一人だった。生まれた時に貧乏ではなく、障がいもなく、都会で育っ  
た・・・これって明らかに運の良い人だよ。そんな人たちしか慶応に  
行けない社会って君はどう思う？僕は絶対に納得しない。許せない。

「私は努力して慶応にきました」って思ってるでしょ（笑）？でも、想  
像してみて。貧乏なうちに生まれた。生まれた時に障がいがあった。あ  
るいは、塾も何もない田舎に生まれた。君の努力と同じ努力で慶応に来  
れたと思う？僕は思わない。

君はどうして学ぶの？「理（ことわり）」にしたがって生きるから、学  
者であり、学生だよ。でも、運不運で一生が決まる社会はおかしい。  
それなら、学者である僕は、全知全能をかけて「理不尽」「不条理」と  
闘わなければいけない。学問は理屈でできている。だから、学生である  
君たちも、あるべき社会、物事の筋道を徹底的に考え、世に問うべきだ  
と思う。理屈で考え抜いて、未来の社会を構想する。それが学問だ。ど

うでしょう。君のいう「あたたかさ」は伝わったかな？どっちかという  
と「熱苦しさ」かもしれないけど（笑）

### 「常に最先端の授業を」

③ 「先生は授業をするとき、どんなことを考えていらっしゃいますか？」

絶対に去年と同じ話はしない。財政社会学を学ぶものとして国の内でも、外でも、先端でいたいからね。だからその瞬間にたどり着けている知見で授業を組み立てている。全体の4割くらいは毎年書き換えているよね。ゼミの運営も同じで、毎年4月になると去年の反省から始まり、どのようにゼミの運営を変えていけばいいかということ必ず学生と話して、一年をスタートするようにしています。今日より素晴らしい明日を。これって誰もが願うことだよ。

### 「死ぬときに色々な思い出が駆け巡る人生を生きて欲しい」

④ 「先生の若い時の経験について教えてください！」

小学校は国立の学校に通ってたのね。で、地元の有名中学を受けたら落ちちゃって。そこからダラダラ生きてたんだけど、中3になったとき覚醒したんだよね。このままじゃ人生終わるなって。あいつらに負け

っぱなしじゃんって。そこから、一日4時間以上寝ないって決めた。  
生きてる限り勉強してやろうと。母に泣かれたよ。頼むから勉強やめて  
くれって。一年で140日くらい学校も休んだかな。時代の先をゆく不登  
校児だった（笑）

ふた月くらいで福岡で1番になった。そして鹿児島の高校に入った。い  
ま思えば中3が人生の分かれ道だった。勉強が好きだったわけじゃない  
し、勉強をやれっていいたいわけでもない。でも、命懸けで徹底的に何  
かをやるって大事かもね。たとえ人に迷惑かけても、バカにされても、  
脇目も振らずやり倒すっていう経験。

そうやって大学からいまにいたるまで、キャリア的には隙のない人生を  
送ってきたと思う。でもね、2011年に脳内出血で死にかけたんです  
よ。よく「走馬燈のように思い出が駆け巡る」っていうじゃない？なの  
に何も浮かばなかったんだよね。

ぞっとしたよ。勉強ばかりで。競争ばかりで。中身のない生き方を  
していたんだ。思い出らしい思い出というか、思い出したい何かがな  
い。そこからかな。家族と過ごす時間を大事にするようになったのは。  
僕はね、死ぬときに色々な思い出が駆け巡る人生がいいと思う。悔しい  
ことや、うれしいこと、泣けること、いろんなこと。君たちも人生がま

だ 60 年以上あるんだから、生きかたを変えるには十分すぎるくらい若い。何が自分にとっての幸せか、もう一度、考えてみるのもいいかもしれない。

「今の大学生には自由がある。これからどう人生を切り開くかが大切」

⑤ 「先生から見た現在の大学生の印象、また慶應生の印象を教えてください！」

僕たちが若かったときよりもずっと自由だと思う。全然、しばられていない。これは素晴らしいことだよ。僕たちの時代は、いったん会社に入ったら勤めあげるのが常識だったけれど、いまの時代は移動するのも自由だしね。僕たちの時より不安定だけど、ずっと自由な気がするね。

ただ、そのいっぽうで、さまざまな選択肢の中から人生を選び取る、ということができない人が多い。本当の意味で「エリート」であろうとする意識がよわい気がするかな。もったいないよね。僕たちの時より自由だけど就活一択。せっかく自由になったのにみんな似たような行動をとっている。そこがもったいない。僕にとってのエリートって「人のやらないことをやって、自分のポジションを作りあげていくひと」。それは怖いし、しんどい。でも、自分の生を生き、自分の死を死ねない人がエ

リートになれるとは思わない。フロントランナーになって欲しい。だって君たちは<誇り高き塾生>なんだから。

「どんな人でありたいかを考えられる人に来て欲しい」

⑥ 「井手ゼミを志望する学生に求めるものを教えてください！」

僕たちはなりたい自分を自分なりに考えるよね。そして、そのなりたい自分になろうと頑張る。でも、未来っていまの延長線上だよな？だからこそ、「いま、どんな人間でありたいか」を考えられる学生に来てほしい。子どものときの自分から「あんたカッコいいわ」って言ってもらえる、そんな学生にぜひ来てほしい。

2年生へのメッセージ！

⑦ 「最後にゼミ選びをする2年生に向けてメッセージをお願いします！  
す！」

学んで生きる、と書いて学生だよな。何を学びたいかという基準でゼミを選ぶ。それが基本なんだろうね。単位が取りやすい、なんて基準じゃなくてさ。でも、何を学ぶか、と同時に、生きかたも問われているってことを想像してほしいな。そもそも学んで生きるということじたい、生きかたの問題なんだから。「徹底的に学んで、生きる」のもいい。でも

さ、「学びながら、徹底的に生きる」のもいい。そんな観点からゼミを選ぶのもいいんじゃないかな。僕は徹底的に生きる学生を応援したい。だからいろんな出会いの場を作ろうと思っている。そして、僕自身、そんな「学生」と一緒に、精一杯生きていきたい。

「お時間を割いてくださり、どうもありがとうございました。貴重なお話が伺えて、とても嬉しいです。」

## 編集後記

大学の講義を始め、テレビ出演に講演会、本の出版とご多忙なスケジュールの中で時間を割いてくださいましたこと、井手先生には誠に感謝致します。私自身、井手先生の授業を大変興味深く聞いている学生の一人なのですが、今回はそんな井手先生の人生観のようなものに迫りたいという思いでインタビューさせていただきました。記事をお読み頂く皆様には、先生のおっしゃる通り、ぜひこれからの生き方・何をして生きていきたいか、ということも視野に入れながらゼミ選びをして頂きたいと思います。